

## “Analytica Posteriora” に於けるエピステマー論

—— 71 a 1 —— 11 を中心に ——

岩 岡 悠 紀 子

我々が日常、「あらゆる三角形の内角の和は二直角である」とか「すべての広葉樹は落葉性である」ということを「知っている」という場合、それらのことは、厳密には一体、いかなる意味でそういえるのか、また、どのようにして以上のような知識は知識として得られるようになったのか、いつ、いかなる仕方であるものとなったのだろうか。即ち、帰納にせよ、演繹にせよ、正しい知識を得るために必要な論証を構成する条件とは、どのような条件なのだろうか。これらの問題について、厳格、且つ詳細に探究されたものが、アリストテレスの「分析論後書」なのである。アリストテレスは、この「後書」で、「前書」での、いわゆる伝統的三段論法の詳細な論理を基にして、さらに論証の構造を吟味し、その論証によって得られる知識が、一体いかなる性格をもち、単なる知識、つまり学問的知識以外の厳密な知識とは異なって、どのようにして得られるのかを明らかにしている。従って、論理学は、言うまでもなく、アリストテレスにおいては、思考の道具（オルガノン）であるから、その論理を成り立たしめる原理と構成要素・項系列等について

も詳細な探究がなされているが、それらは一応、アリストテレス自身によって明言された事実として考えられるから、ここではその原理や条件が導き出され、吟味されるまでの思考過程で、最もその根幹となっているエピステマーについての一考察を試みたいと思う。

アリストテレスは、「後書」で、単なる知識とエピステマー、即ち学問的知識とを明確に区別している。エピステマーが存在するのは、証明、特にこの場合、三段論法形式をもつ論証から生み出される場合である。そして、その論証が進められる際、考えなければならぬのが、出発点となる知識なのである。というのは、数学やその他の諸学問も、それらが演繹にせよ帰納にせよ、いずれも全く、すでに存在している知識によってその学問の知識を得たり、認識するからである。即ち、我々が感覚の働きによるのではなく、アリストテレスの言葉をそのまま借りると、「思考の働きによった推論によって、知識を伝えたり、獲得したりするのはすべて我々の内にすでに存在している知識から生じる」のである。

では、この「すでに存在している知識」とは、一体いかなるものなのだろうか。それは、一つには、「それらがあるという事実」についての知識であり、一つには「そこで言われている言葉の意味」についての知識である。たとえば、前者の例として「すべてのものは、真に肯定されるか否定されるかのどちらかである」という排中律については、我々はこれを「すでに前もってある」「真実である・その通りである」ということを知っていなければならないし、また後者の例として

「三角形とは、これこれのものである」という場合も、その意味をあらかじめ知っていなければならないのである。また、アリストテレスは、以上、二つの予備知識・存在と意味の例として「 $\tau$ 」をあげている。即ち、それが何を意味しているかということと、その意味に応じた何かが存在するということを知っておかなければならないのである。

さて、我々は、この「すでに存在している知識」を出発点として、即ち前提として論証を行うわけであるが、結果として出てくる命題のうちでも、推論によって得られた結論と同時に認識されるものもある。即ち、我々がそれについて知識をもっている普遍の下にあげられる個物の場合である。たとえば、「あらゆる三角形の内角の和は二直角である」という普遍的前提を、人はあらかじめ知っていたわけだが、「半円の中に描かれるこの図形が三角形である」という命題については、「この図形の内角の和は二直角である」という結論を引き出すと同時に知るようになるのである。ところがこれに

反して、何かある基体に述語されることのないもの、即ち述語とはなり得ないところの個物は、中名辞(メソン)によって認識されるというわけにはいかないものである。たとえば、「ソクラテスは死すべきものである」「人間は死すべきものである」故に「ソクラテスは人間である」ということにはならないのである。なぜなら、「ソクラテスは人間である」ということが言えるためには、他に前提がなければならぬからである。(ソクラテスは犬であるかもしれないし、人間とは限らないから。)

さて、このような前提から導かれる結論を含んだ三段論法、特にここでは論証(アポダイクシス)によって生じる知識が、エピステマー(学問的知識)なのである。我々は、いかなる時に、エピステマーをもつと言えるのか、またエピステマーとはいかなる事物を対象にするのか、その本質を次に考えてみよう。

我々は、ある事実の原因を、まさにその事実の原因であると知っており、その事実が他の仕方ではあり得ないことも知っていると思う場合、ある事実についてのエピステマーをもっていると考える。つまり、付帯的ではなく、端的にある事実を知っていると考えるのである。従って、原因を知る時にだけ、エピステマーを持つのである。そのエピステマーを生み出す論証の前提が真なる原因でなければならぬことになる。学問的知識があり得るためには、必然的に論証的証明がなければならないから、真で、原初的・直接的な、

つまり結論よりもよく知られ、より先なるもので、結論の原因であるような前提でなければならぬのである。なぜなら第一に、真でないものを知ることが不可能だから、前提は真でなければならぬ。また、原初的・直接的という意味は、もしも中名辞（媒介項）を必要とする間接的なものならば、必ず中間に媒介項がなければ知られることもないのだから、そういう媒介項が主語と述語の間に入らない直接的な前提から出発しなければならぬのである。さらに、原初的とは、それ以前にさかのぼって論証できないもの・他の前提がそれより先でないという意味である。なぜなら、もしそうでなければ、論証がそこから始められる前提についての証明がさらになければ、知識をもつはずがないからである。先に見たように、我々は、「その事物の原因をまさにその事実の原因として、またこの事実が他の仕方ではあり得ないことの原因として認識している」場合にだけ、エピソードを持っていうことだった。この故に、前提は原因でなければならなかった。従って、前提は、他に依存することが少ないという意味で、より先なるものであり、結論の原因なのである。では次に、「結論よりも、いっそうよく知られるもの」とは、正確にはどういう意味なのかを具体例をあげて考えてみよう。たとえば、「CはAである」「BはCである」という前提から「BはAである」という結論が論証によって得られた時、結論「BはAである」という知識は、前提二つの知識に依存しているが、一方、前提の各々「CはAである」「BはCであ

る」は、それ自身において明らかであり、結論「BがAである」に依存していない。従って、前提の各々は、結論よりも、いっそうよく知られるものなのである。

ここで一言すれば、「より先なるもの」とか「いっそうよく知られるもの」という語は、言うまでもなく、いわゆるアリストテレスの術語であり、以上みた外に特殊な意味で言われるのである。即ち、「より先なるもの」ということは、「本性上より先なるもの」と「我々にとって先なるもの」とが、「より知られるもの」ということも、「本性上より知られるもの」と「我々にとってより知られるもの」との二義にとられるのである。つまり、感覚により近いものは、「我々にとって」より先のものであり、より知られるものであって感覚からより遠いものが端的により先なるもので、より知られるものなのである。従って、この意味からすると、感覚から最も遠いものが最も普遍的なものであり、感覚に最も近いものが個物である。このように、「より先なるもの」という意味は、明らかに時間上、先行するというのではなく、事物の本性上、より根本的という意味であり、「より知られるもの」という意味も、「あらかじめ知られる」とか「時間上より早く知られる」とかいう意味ではないのである。さて、我が事物についてのエピソードをもつのは、真なる前提に基づいた論証的証明がなされる場合であるから、我々は、論証がそこから出発する第一の原理をあらかじめ知らなければならぬだけでなく、その原理を結論よりもいっそう知っ

ていなければならぬ。次に、この第一の原理とはいかなるもので、それを出発点とする論証の結論として得られたエピステーメーの対象とは、どのような仕方でも獲得されるのか考えてみよう。

事物の知識を得るためには、その事物がそこから出発する第一の原理を知らなければならぬ。というのは、もしこの第一の原理（命題）がなければ、我々はその前の命題に基づいて後の命題を知ることができず、知識をもつための論証を無限にさかのぼらねばならず、結局は、知識は存在できなくなるからである。従って、第一の命題があるとすれば、これについては証明が存在しないのだから、この命題は、論証的な意味では知られないものである。ところで、もしこの第一の命題が上述の意味で知られないならば、これから帰結される命題も、同様の意味で知られえず、ただ第一の命題だけが端的に（直観的に）真であると知られるだけだ、という考えもあり得る。しかし、これは誤っている。なぜならば、先にみたように、論証によってエピステーメーを得るためには、論証がそこから出発する前提命題の知識をもたねばならず、より先の前提へさかのぼることは無限ではなく、必然的に出発点となる第一の前提があるからである。即ち、あらゆる知識が論証され得るものではなく、第一の前提命題は論証されない（必要ない）のである。故に、ある事物についてのエピステーメーがあるだけでなく、そのエピステーメーにはアルケー（出発点）があるのである。従って、論証も、無限

にその述語の系列が上方へさかのぼることはなく、あらゆるものが論証によって証明されるといっても、その証明の過程は、言うまでもなく有限なものである。また、あらゆるものが、相互から論証できるとする循環的なアルケーの考え方もある。ここで、「相互から」というのは、ギリシア語の表現であって、その意味するところは、次のようなものである。もし、論証が結論よりも先のものから、即ち結論よりもいっそうよく知られるものから出発するのでなければ、同じものに対してより先のものであると共に、より後のものであることになるからである。また、もしそういうことがあるとするならば、同じそういうことがあるに他ならないことになる。アリストテレスの例をあげると、たとえば、AがあるならばBがあることが必然であり、BがあるならばCのあることが必然であるならば、AがあるならばCがあることになる。この時、もしAがあるならばBがあることが必然であり、BがあるならばAのあることが必然であるならば、このAをCとおけば、BがあるならばAがあることは、BがあるならばCがあるということになって、AがあるならばAがあるということになる。つまり、存在が円環をなすのだから、あらゆるものが相互から、即ち循環的に論証できるといえるのである。だから、普遍から個物が論証されるとしても、普遍も個物によって論証されるということになる。とすれば、これは、アリストテレスの存在の階層秩序とは全く一致しないことになる。従って、互いに一方が他方の述語とならないも

のは、どのようにしてもこれを循環的に証明することはできないから、この考え方からは、論証が成立しないのである。

さて、厳密な意味で知られ得るもの、即ちエピステーメーの対象となるものは、それがいまあるところと異なった他の仕方ではあり得ない必然なものであるから、論証によって得られた知識も必然なものでなければならぬ。従って、論証は、必然な原理から生じなければならぬのである。つまり、端的な意味での知識は、述語（属性）が述語されるもの、即ち、主語の本質のうちに含まれるという場合と、主語が述語のうちに含まれている場合、即ち類と種の場合とがある。（たとえば、「ソクラテスは人間である」「人間は動物である」などの場合）知識の対象は、その事物の全体（たとえば三角形一般）について、そのうちの任意のどれをとっても（二等辺三角形や不等辺三角形）、端的に直接にあてはまることが証明される場合、即ち普遍的なものである場合である。たとえば、内角の和が二直角であることは、三角形について、それが三角形である限りにおいてあることであって、任意の図形についてではない。つまり、三角形の普遍的な属性であるが、一般的な図形の属性とはいえないのである。また、二等辺三角形を例にとれば、その内角の和は、確かにどの二等辺三角形も二直角であるが、それは第一のものとして二等辺三角形である限りにおいてそうなのではなく、三角形である限りにおいてそうなのである。

さて、エピステーメーの本質とその対象が以上で大体明らかにされたので、最後に、論証の出発点となる直接的な第一の原理を認識しない限り、論証的知識を我々は持ち得ないから、その第一の原理を認識する能力は、我々の内に生得的に具わっているものか、後天的なのか、あるいは、もともと我々の内に生得的に具わっているのだが、知られないままであるのかどうかをみてみよう。まず第一に、その能力が現に我々の内にあるものならば、論証よりも明確な認識をもっているのに、それを知らずにいるという不合理な帰結となる。一方、我々の内にはもともとなかったのに、後で獲得するとすればどうであろうか。最初に述べたように、我々は、すでに存在している知識にもとづいて、知識を伝えたり認識したりするのであった。従って、もしこの能力が後天的であれば、一体どのようにしてそのすでに存在している知識にもとづくことなく知識を獲得したり認識できるのだろうか。故に、これも不可能なのである。とすれば、やはり、プラトンが我々に示した如く、もともと我々の内に生得的に具わっているのだが、日常それに気づかずにいるのであり、知識を伝えたり学んだりするのも、魂が肉体に宿る以前に獲得した知識を思い出すに他ならないのであろうか。アリストテレスによれば、我々は、生来、論証や第一の原理（エピステーメー）を知る能力よりは、明確さにおいて劣るある種の潜在的な認識能力をもっていなければならないという。実際、すべての動物は、感覚という生得的な判別能力をもっている。この感覚によつ

て、動物の内に感覚内容が残存して、魂の内に保持され得、  
そうして記憶が生れ、同じものについてくり返し得られた記  
憶から経験が生じるのである。そして、この経験から、普遍  
が魂の内定着する場合、即ちすべての事例の内同じ一つ  
のものが含まれている時、それが魂の内において多から離れ  
一として定着する場合、人間におけるテクネーとエピステー  
メーのアルケーがそれぞれあるのである。そうすると、エピ  
ステーメーの名に価する命題を獲得する能力が始めから確固  
たるものとして、我々の内に生得的にあるのではなく、また  
認識の点でよりすぐれた他の諸能力から生じてくるものでも  
なく、感覚から我々に生じてくるのである。それは、たとえ  
れば、アリストテレスの持ち出している例をかりると、戦い  
の中、戦列に総退却がおこった際、一人が立ち止まると、も  
う一人が立ち止まり、次々と立ち止まることが波及して、つ  
いには最初に退却した者にまで及ぶようなものである。  
このような素質を魂は具えているのである。つまり、個物が  
普遍の一例としてつなぎ止められる時、同じ普遍に属する他  
の個物も同様に止まって次々と同じことがおこり、一般的  
ものが生じてゆくのである。このようにして我々は、第一の  
原理を、いわゆる帰納法によって知ることを余儀なくされる。  
しかしながら、この帰納法については、言うまでもなく、様  
様なアポリアがあつて、それですべてが片付くわけではない。  
というのも、確かに我々は帰納によって記憶から経験（知識  
の前段階のもの）を生じ、この経験からエピステーメーを生

じるのだが、アリストテレス自身の探究過程をたどつてみて  
も、第一巻では数学をその代表として演繹的推論がその大部  
分を占め、第二巻では、生物学や天文学の領域でも、厳密な  
意味でのエピステーメーであるためには論証を基にした分析  
が必要であることをくり返し述べているのだが、その帰納に  
ついては先にみたように、第一の前提を認識する能力の起源  
を示唆するにとどまっている。そして、さらに、我々が思考  
に関する能力によって真理を得る場合、ヌース以外にはいか  
なるものも論証による知識よりも真なるものはなく、ヌース  
がエピステーメーのアルケーであると言っているからである。  
即ち、我々は経験によって個々の例を普遍の下に認識するの  
だが、それがエピステーメーとして認識される場合には、対  
象の素材を捨象して形相化するという作用を、即ち、可能態  
としてある知識を現実態としてある知識にする作用を行うヌ  
ースが必要となってくる。たとえて言えば、光が、可能態と  
してある色を、現実態としてある色にする作用をもつのと同  
様に、あらゆるものを作り出す現実的状態としてのヌースが  
必然的になければならなくなってくる。これが、ポイエーテ  
イコス・ヌースいわゆる能動理性に他ならない。能動理性は、  
魂から独立し、いかなる作用も受けることなく純一で、その  
本質は現実態であり、不死であり永遠なヌースであるから、  
当然、他から作用を受けることもない故に、我々に何もその  
記憶がないのである。こうしてみると、我々の第一前提の認  
識というものは、帰納によるのだが、得られた個々の例が積

み重なって、それがエピステメーとなるまでには、断定を許さない様々の問題があることがわかる。分析論後書それ自体は、非常に難解で、テキストを読む上ではいろいろ困難を感じさせられるアリストテレス独自の術語がある。特に、論証の原理や項系列が議論されている箇所は、論理そのものは明快なものなのに、わかりにくい点が多いのである。これに比し、第二巻以降は、定義や原因論を始め、論証に関連した多数の興味深い様々の問題を含む議論がなされているが、それだけに、先の帰納法の問題も含め、三段論法によるエピステメーに関する議論ほど明確な形では述べられていない、未解決のまま我々に投げかけられた形で終わっているものが多いのである。第一前提の問題にしてもヌースについても、プラトンの哲学との比較検討をぬきにしては考えられないものもあり、枚挙にいとまがないのである。その一例として「ポリテイア」や「バイドーン」で述べられているディアレクティケーの議論において、問答者が互いに問答を続けていって、互いに同意を与えながら一致する点（ホモロゲーマ）に到ろうとするのだが、その出発点とその一致する点は、ヒュポテシスと考えられるのであり、このヒュポテシスを次々とさかのぼっていくと、その究極に善のアイデアがあるのである。つまり、ヒュポテシス（仮定・前提）を立てて問題を考察するのだが、ヒュポテシスを基にして、より上への仮定へをかのぼって、最後に仮定ではない原理であり無前提の始元へと、即ち善のアイデアに到達するというものである。これは、我々

が前にもみたアリストテレスの存在の階層秩序において、類の最高概念である存在とを合わせて考えれば、何かそこに、古来、プラトンと対立させて考えられる傾向にあったアリストテレスの思想も非常に興味でプラトニックであることがわかる。従って、この両者が、類似しているという点からヒントを得て、証明ができれば、様々な認識論上のアポリアが解決されるのではないだろうか。だが、ここでは、本論からもそれ、単純には述べられない大問題であるから、今後の課題として、以上で終えることにしよう。

#### 参考文献

- Aristotle's Prior And Posterior Analytics,  
W. D. Ross, Oxford
- Aristotle's Posterior Analytics, Jonathan  
Barnes, Oxford
- The Basic Works of Aristotle, Richard  
Mckeon, Random House
- Aristotle II Posterior Analytics, Hugh  
Tredennick, Harvard
- Aristotle: The Growth & Structure of  
His Thought, G. E. R. Lloyd, Cambridge
- 〔「アリストテレス」 川田殖訳 みすず書房〕

(柴田女子高等学校へ弘前V・非常勤)